

大学生による情報教育支援ボランティア活動 ——地域が求める支援とは

今野紀子^{†1} 土肥紳一^{†1}

地域の情報リテラシーの向上・情報教育の充実を図ることを目的とした大学生による情報教育支援ボランティア派遣事業が進められている。学生ボランティアは地域の教育機関に派遣され、PCを利用した教育補助、情報処理操作補助や助言業務を担っている。今回、派遣先の教育現場が求める効果的な情報教育支援のあり方や、さらなる地域連携のあり方についての意識調査を実施した。分析結果から、教育現場では、情報教育の必要性を実感しているが知識・技術を兼ね備えた指導者が不足している現状があり、学生ボランティアをチームティーチングなどで積極的に教育場面に活用したいという意識が強いこと、そのため、教員と一緒に授業づくりができる技量を持つ人材を求めていることが分かった。学生ボランティアの位置づけは、あくまでも情報教育を支援する黒子としての補助要員であるが、この調査によって派遣する側とされる側の支援のあり方についての意識のズレが明確になった。ミスマッチを防止するための対策、派遣事業の位置づけの再検討が必要となる。

Information Education Support to a Community by University Student's Volunteers — What is the Ideal Way of the Requested Support?

NORIKO KONNO^{†1} and SHINICHI DOHI^{†1}

The information education support project to a community by university student's volunteers is promoted. This project has aimed to improve local populace's information literacy. In this study, I carried out consciousness investigation about the ideal way of the requested support to a community by university student's volunteers. As a result, it is recognized that consciousness to want to utilize a university student's volunteers by team teaching positively in an education scene is strong. Therefore, about a university student's volunteers, it is recognized that ability to be able to do the making of class with a teacher is needed.

1. はじめに

高度情報化が急速に進む今日、社会に必要な情報活用能力の育成が、国を中心として、特に教育現場において強く求められている¹⁾。このような情報教育の推進・充実のためには、専門知識や技術を持ち、情報教育を指導・支援できる人材の養成が喫緊の課題であるが、現実には十分ではないとの指摘もある²⁾。そうした背景の中、筆者らが所属する大学と、キャンパスの所在地である千葉県印西市との間で「連携協力に関する協定書」が締結され、情報環境学を専攻する学生を対象とした情報教育支援ボランティア派遣事業が開始された³⁾。当該事業の目的は、地域の情報リテラシーの向上、情報教育の充実を図ることであり、学生ボランティアは、主に市内教育機関におけるコンピュータを利用する教育の補助と、情報処理操作技術補助および助言業務を担う。同時にこの事業は、学生本人への教育という面でも大きな意味を持つ⁴⁾。小松は、地域密着型のボランティア活動を通して学生に培われる力を「地域教育力」ととらえ、学生への教育的意義を指摘している⁵⁾。本事業においても、学生は日頃学んでいる専門知識・技術を地域の教育現場で活用することで多くの学びを得ている。文部科学省は、大学教育の中にボランティア活動を組み込むことを推進し、単位認定制度などにより大学生がボランティア活動に参加しやすい環境の整備を進めている⁶⁾。しかしながら、ボランティア活動が大学教育に組み込まれるに従い、ボランティア学生の質・能力と、派遣先の要求とのミスマッチという問題も危惧されるようになった。辻らは、大学生のボランティア活動参加を障害する要因に、ボランティア情報の不足をあげ、それを解消するシステムの構築を提案している⁷⁾。小林は、派遣する側と派遣される側の双方が満足できるボランティア活動のためには、両者の意識のマッチングが重要であり、第1にボランティアを受け入れる側のニーズの把握が大切であると指摘している⁸⁾。本研究では、情報教育支援ボランティアを受け入れる側（派遣先）のニーズ、つまり教育現場が当該事業に対し何を期待し、現状をどう認識しているのか、また派遣する側と派遣される側の意識の相違は、実際どのようなものであるのかを明らかにし、その改善策を探る。

実施後2年を経過した当該事業の現状と問題点を検証し、調査結果を分析することで、「地域から求められる情報教育支援ボランティア像」を明確にすると同時に、とりわけ派遣先の視点に立った、情報教育支援のより効果的な在り方・地域連携の今後の課題について考察

^{†1} 東京電機大学情報環境学部
School of Information Environment, Tokyo Denki University

する。

2. 情報教育支援ボランティア派遣事業

本事業は 2002～2006 年度の印西市第一次情報化計画⁹⁾の中に位置づけられている事業で、「情報化の進展を支える仕組みづくり—市民の情報リテラシの向上」の中にある「情報化支援ボランティアの組織化」が柱になっている。以下に当該事業の概略を述べる。

(1) 目的

地域の小中学校など教育機関に大学生の情報教育支援ボランティアを派遣し、コンピュータ利用学習や情報処理操作技術、知識など情報教育の充実を図る。

(2) 派遣時間

派遣期間は、1 学生につき 1 期 30 時間（1 日 3 時間程度の活動）である。

(3) オリエンテーション

参加学生に対して、印西市教育センターの派遣事業担当者、大学側教職員が行う事前指導である。内容は以下のとおりで、1 時間程度実施する。

① 印西市教育センター派遣事業担当者からの説明

参加にあたっての心構え、守秘義務、具体的業務と学校側からの期待と状況の説明を行う。

② 大学側の担当教員による指導

義務教育の現状、児童生徒への接し方、情報教育のあり方の指導を行う。

③ 大学側事務部からの注意事項

ボランティア参加にあたっての注意、素養科目「ボランティア活動」の履修手続きおよび単位認定について、保険加入手続き、誓約書の提出説明を行う。

(4) 大学での履修取扱い

派遣事業は、参加学生の申請により「ボランティア活動」として素養科目（選択 2 単位）で単位認定される。

(5) 参加状況

2005 年度は市内小中学校 9 校で、参加学生 12 名であった。2006 年度には 6 校増加の 15 校から派遣要請され 32 名の学生が参加。2007 年度は、4 月時点で実施計画が不明確な学校を除く 14 校から派遣要請がある。

3. 研究方法

地域から求められる情報教育支援のあり方を明確にするため、当該事業に対する調査を実施する。

(1) 方法：質問紙調査（無記名アンケート方式）と面接調査（半構造的インタビュー方式）の実施。派遣先教員への質問紙調査は印西市教育センターを経由し、対象の教育機関に配布・回収する。参加学生への質問紙調査は活動終了後、大学側担当者が配付・回収する。面接調査は質問紙調査の回収後、各立場である派遣先教員・参加学生の 2 者に大学側担当者を交え、自由な対話を重視しつつ特定テーマについて話し合う「半構造的インタビュー」方式で 1 時間程度実施する。

(2) 対象：情報教育支援ボランティア派遣事業の対象となっている印西市内の小中学校 19 校（未実施校を含む）の教員と参加学生 44 名を対象とする。

(3) 時期：2007 年 3 月下旬（2006 年度派遣事業終了後）～2007 年 6 月に実施する。

(4) 調査内容：派遣先教員を対象とした質問紙調査項目を表 1 に示す。参加学生を対象とした質問紙調査は、彼らの活動に対する意識を調査するため「活動にあたり心がけた点」「活動中の問題点」「活動して良かった点」「反省点」の 4 項目についてそれぞれ自由記述で回答する構成となっている。

4. 結 果

4.1 派遣先教員を対象とした質問紙調査

印西市内の小中学校 19 校に勤務する教員に配布し、89 件の有効回答が得られた。各項目は「1：まったくそうではない」から「5：非常にそうである」の 5 段階リッカート尺度による評価となっている。中学校からの回答数が少なく、かつ小学校との有意差が認められなかったため、校種を分けず分析を行った。以下に結果を述べる。なお、説明文中の β は標準化偏回帰係数、 R^2 は決定係数（寄与率）、 r はピアソン積率相関係数を示す。

(1) 情報教育の必要性に関する意識

「日頃、情報教育の必要性を感じているか」の結果を図 1 に示す。1 と 2 は 0%であり、3 が 10%、4 が 44%、5 が 46%であった。平均は 4.5 である。義務教育現場の情報教育推進意識の高さがうかがえる。必要度には有用度（図 2 参照）との相関関係（ $r = 0.42$ ）があった。

(2) 派遣事業の有用度

「情報教育支援ボランティア派遣事業は、有用であると思うか」の結果を図 2 に示す。1 と

表 1 情報教育支援ボランティア派遣事業に係るアンケート調査
Table 1 Questionnaire survey items.

評価項目について 5 段階リッカート尺度で評価する。 * 「1: まったくそうでない」「2: あまりそうでない」「3: どちらともいえない」「4: ややそうである」「5: 非常にそうである」	
項目	評価内容
1. 情報教育の必要性に関する意識	日頃、情報教育の必要性を感じていますか。
2. 派遣事業の有用度	情報教育支援ボランティア派遣事業は、有用であると思いますか。
3. 現状の満足度（実施校のみ）	派遣された情報教育支援ボランティアは、役立ちましたか。
4. 依頼したい仕事内容の順位	情報教育支援ボランティアに依頼したい仕事内容について、希望順位を記入してください。（選択式）
5. 専門知識・技術力の重要度	情報教育支援ボランティアの「IT に関する高度な専門知識・技術力」について、どの程度重視していますか。
6. 専門知識・技術力の満足度（実施校のみ）	派遣された情報教育支援ボランティアの「IT に関する専門知識・技術力」について、どの程度満足していますか。
7. コミュニケーション力の重要度	情報教育支援ボランティアの「児童生徒への話しかけ等のコミュニケーション」について、どの程度重視していますか。
8. コミュニケーション力の満足度（実施校のみ）	派遣された情報教育支援ボランティアの「児童生徒への話しかけ等のコミュニケーション」には、どの程度満足していますか。
9. 指導力の重要度	情報教育支援ボランティアの「指導力」について、どの程度重視していますか。
10. 指導力の満足度（実施校のみ）	派遣された情報教育支援ボランティアの「指導力」には、どの程度満足していますか。
11. 提案・創意工夫力の重要度	情報教育支援ボランティアの「IT 活用への助言や創意工夫」について、どの程度重視していますか。
12. 提案・創意工夫力の満足度（実施校のみ）	派遣された情報教育支援ボランティアの「IT 活用への助言や創意工夫」には、どの程度満足していますか。
13. マナーの重要度	情報教育支援ボランティアの「言葉遣いや日常の挨拶といったマナー」について、どの程度重視していますか。
14. マナーの満足度（実施校のみ）	派遣された情報教育支援ボランティアの「言葉遣いや日常の挨拶といったマナー」には、どの程度満足していますか。
15. 外見の適切さの重要度	情報教育支援ボランティアの「服装や髪型といった外見の適切さ」について、どの程度重視していますか。
16. 外見の適切さの満足度（実施校のみ）	派遣された情報教育支援ボランティアの「服装や髪型といった外見の適切さ」には、どの程度満足していますか。
17. チームティーチングによる授業参画の意識	情報教育支援ボランティアとの「授業のチームティーチング（TT）」について、どの程度取り組みたいですか。
18. 児童生徒の反応度（実施校のみ）	授業補助場面などで、児童生徒の反応は、いかがでしたか
19. 希望度	情報教育支援ボランティア派遣事業をどの程度希望しますか。
20. 改善すべき問題 <自由記述式>	情報教育支援ボランティアの問題点あるいは要望がありましたらお書きください。
21. 大学担当者への要望 <自由記述式>	大学担当者へのご意見・要望がありましたらお書きください。

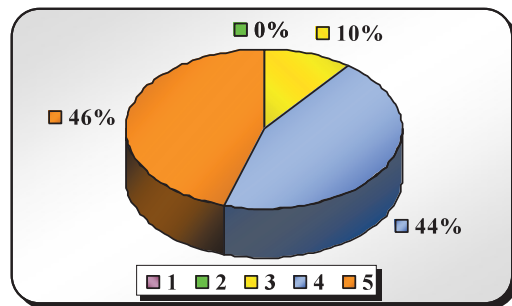


図 1 情報教育の必要性
Fig. 1 Necessity of information education.

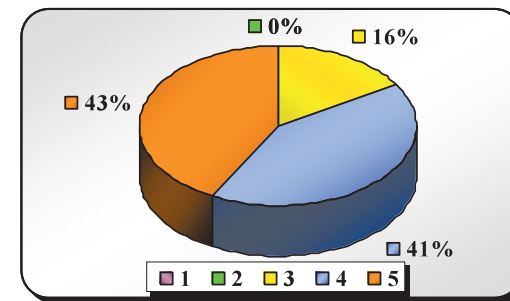


図 2 派遣事業の有用度
Fig. 2 Utility of dispatch business.

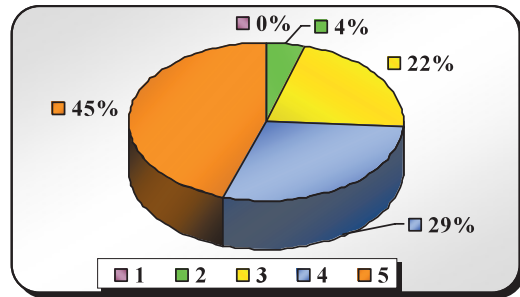


図3 現状の満足度
Fig.3 Current satisfaction rating.

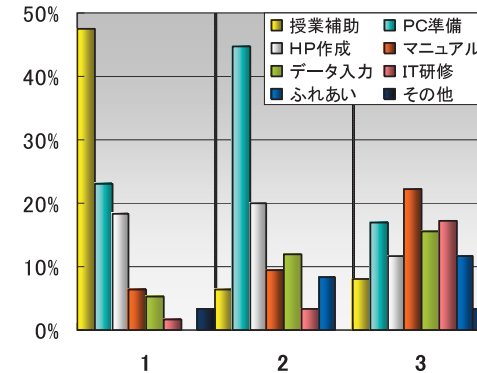


図4 依頼したい仕事内容の順位
Fig.4 Order of work.

2は0%であり、3が16%、4が41%、5が43%であった。平均値は4.3である。有用度は現状の満足度 ($r = 0.47$) と希望度 ($r = 0.57$) との相関関係があった (図3, 図13参照)。

(3) 現状の満足度 (役立ち度)

「派遣された情報教育支援ボランティアは、役立ったか」の結果を図3に示す。1は0%、2は4%、3が22%、4が29%、5が45%であった。平均値は4.2である。重回帰分析による要因分析からは、現状の満足度には、ボランティア学生の「専門知識・技術力の満足度 ($\beta = 0.48$)」「指導力の満足度 ($\beta = 0.28$)」「外見の適切さの満足度 ($\beta = 0.23$)」といった要因がそれぞれ関与 ($R^2 = 0.67$) していた。

(4) 依頼したい仕事内容の順位

「情報教育支援ボランティアに依頼したい仕事内容についての希望順位 (選択式)」上位3位の結果を図4に示す。横軸が希望順位、縦軸が希望割合である。学生ボランティアに対して、「授業補助」「PCなど情報機器の準備・整備」の割合がきわめて高く、「HP作成」「マニュアル作成」などが比較的高いことが分かった。

(5) 専門知識・技術力の重要度と満足度

「情報教育支援ボランティアの『ITに関する高度な専門知識・技術力』について、どの程度重視しているか」という重要度と、「派遣された情報教育支援ボランティアの『ITに関する専門知識・技術力』について、どの程度満足しているか」の満足度についての結果を図5に示す。重要度、満足度の平均値はともに4.2であったが、両者の4の割合が異なっている。派遣先が求める仕事内容において、専門知識・技術力がうまく発揮できた学生は高い評価となったが、そうでなかった学生は満足度を低くしており、ミスマッチによる学生の「質」の

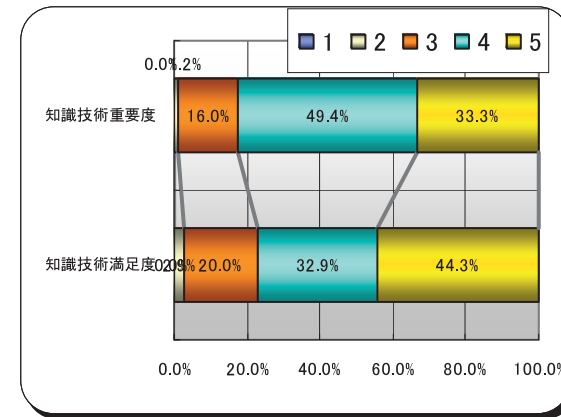


図5 専門知識・技術力の重要度と満足度
Fig.5 Importance degree and satisfaction rating of expertise and technology.

差があったことがうかがえる。

(6) コミュニケーション力の重要度と満足度

「情報教育支援ボランティアの『児童生徒への話しかけなどのコミュニケーション』について、どの程度重視しているか」といった重要度と、「派遣された情報教育支援ボランティア

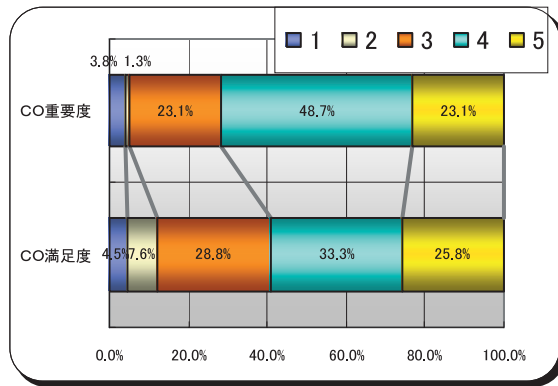


図 6 コミュニケーションの重要度と満足度
Fig. 6 Importance degree and satisfaction rating of communications.

の『児童生徒への話しかけなどのコミュニケーション』には、どの程度満足しているか」といった満足度についての結果を図 6 に示す。重要度平均値は 3.9，満足度平均値 3.7 であった。コミュニケーションの満足度は、役立ち感覚 ($r = 0.60$)，指導力の満足度 ($r = 0.73$)，マナーの満足度 ($r = 0.70$) との相関があった。

(7) 指導力の重要度と満足度

「情報教育支援ボランティアの『指導力』についてどの程度重視しているか」といった重要度と、「派遣された情報教育支援ボランティアの『指導力』には、どの程度満足しているか」といった満足度についての結果を図 7 に示す。重要度平均値は 3.9，満足度平均値 3.8 であった。指導力の満足度は、「現状の満足度 ($\beta = 0.28$)」に関与しており、「外見の適切さの満足度 ($r = 0.60$)」「知識・技術の満足度 ($r = 0.56$)」との相関がみられた。

(8) 提案・創意工夫力の重要度と満足度

「情報教育支援ボランティアの『IT 活用への助言や創意工夫力』について、どの程度重視しているか」といった重要度と、「派遣された情報教育支援ボランティアの『IT 活用への助言や創意工夫力』には、どの程度満足しているか」といった満足度についての結果を図 8 に示す。重要度平均値は 3.8，満足度平均値 3.7 であった。提案・創意工夫力の重要度は、指導力の重要度 ($r = 0.64$) との相関がみられた。

(9) マナーの重要度と満足度

「情報教育支援ボランティアの『言葉遣いや日常の挨拶といったマナー』について、どの

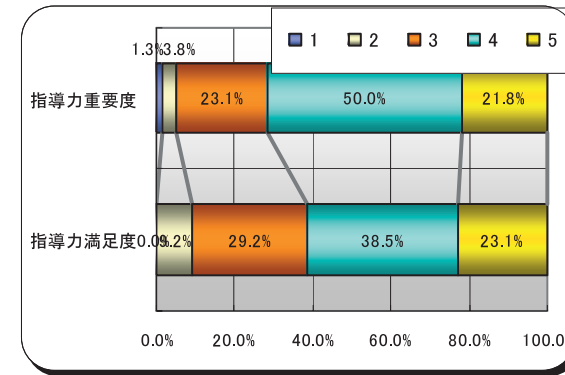


図 7 指導力の重要度と満足度
Fig. 7 Importance degree and satisfaction rating of leadership.

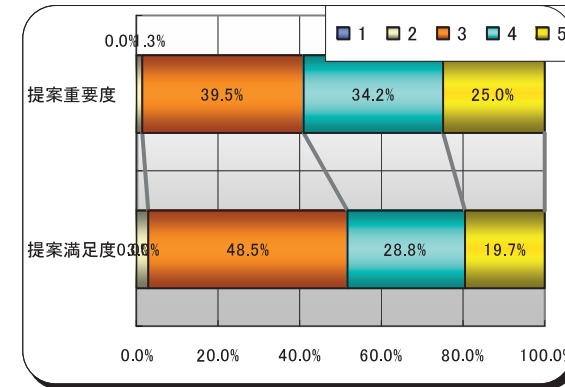


図 8 提案・創意工夫力の重要度と満足度
Fig. 8 Importance degree and satisfaction rating of proposal and inventiveness power.

程度重視しているか」といった重要度と、「派遣された情報教育支援ボランティアの『言葉遣いや日常の挨拶といったマナー』には、どの程度満足しているか」といった満足度についての結果を図 9 に示す。重要度平均値は 4.2，満足度平均値 3.9 であった。マナーの重要度は高く、外見の適切さの重要度 ($r = 0.70$) と相関関係がみられた。マナーの満足度は外見の適切さの満足度 ($r = 0.82$)，コミュニケーションの満足度 ($r = 0.70$)，児童生徒の反応

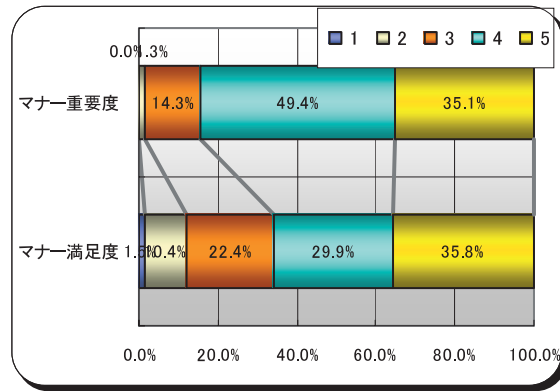


図 9 マナーの重要度と満足度

Fig.9 Importance degree and satisfaction rating of manners.

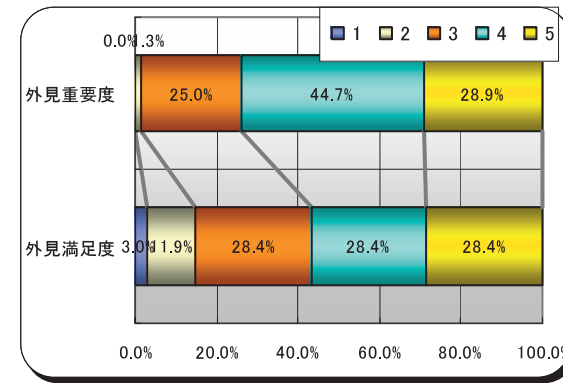


図 10 外見の適切さの重要度と満足度

Fig.10 Importance degree and satisfaction rating of appropriateness of face.

度 ($r = 0.65$) との相関関係があった。

(10) 外見の適切さの重要度と満足度

「情報教育支援ボランティアの『服装や髪型といった外見の適切さ』について、どの程度重視しているか」といった重要度と、「派遣された情報教育支援ボランティアの『服装や髪型といった外見の適切さ』には、どの程度満足しているか」といった満足度の結果を図 10 に示す。重要度平均値は 4.1、満足度平均値 3.7 であった。重要度と満足度の差が大きい項目である。外見の適切さの重要度は、マナーの重要度 ($r = 0.70$) と相関関係がみられた。派遣先教育現場からは、学生ではなく社会人としてのあり方が求められていることが分かる。外見の適切さの満足度はマナーの満足度 ($r = 0.82$)、コミュニケーションの満足度 ($r = 0.66$)、児童生徒の反応度 ($r = 0.67$) との相関関係があった。

(11) チームティーチングによる授業参画の意識

「情報教育支援ボランティアとの『授業のチームティーチング (TT)』について、取り組みたいか」という質問の結果を図 11 に示す。1 と 2 は 3% であり、3 が 22%、4 が 37%、5 が 35% であった。平均値は 4.1 である。授業参画の意識は児童生徒の反応度 ($r = 0.63$) との相関関係がみられた。授業補助場面などで情報教育支援ボランティアに対する児童生徒の反応の良好さが、TT として有効ではないかとの判断につながっていることが分かる。

(12) 児童生徒の反応度

「授業補助場面などで、児童生徒の反応はどうであったか」という質問の結果を図 12 に

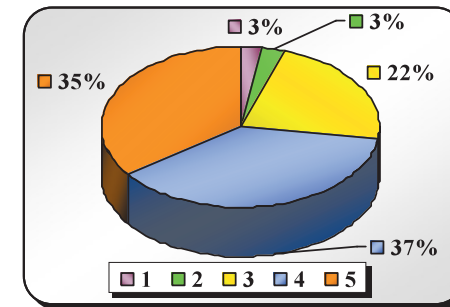


図 11 TT による授業参画の意識

Fig.11 Class participation consideration caused by TT.

示す。1 と 2 は 0% であり、3 が 22%、4 が 48%、5 が 30% であった。平均値は 4.1 である。面接調査からは「個々に対応してくれるので多くの児童が積極的に質問する場面があった」「1 人ひとり丁寧に見てもらえて、子ども達も十分に学習していた」と一斉授業では難しい、個別対応による児童生徒の反応があげられた。

(13) 希望度

「情報教育支援ボランティア派遣事業をどの程度希望するか」という質問の結果を図 13 に示す。1 は 0%、2 は 4% であり、3 が 13%、4 が 35%、5 が 48% であった。平均値は 4.3

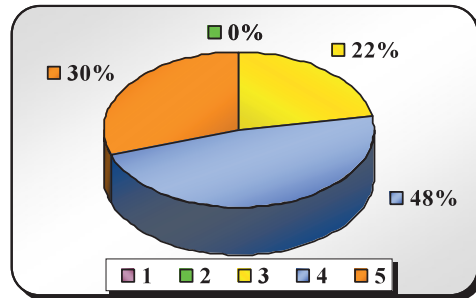


図 12 児童生徒の反応度
Fig. 12 Child student's reactive level.

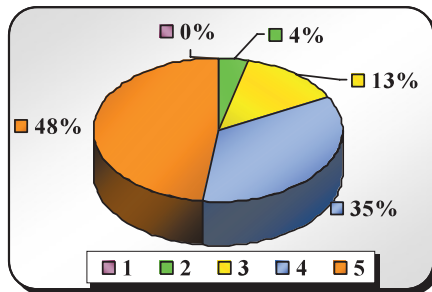


図 13 希望度
Fig. 13 Hope leve.

である。希望度は有用度 ($r = 0.57$)、知識技術の重要度 ($r = 0.52$) との相関関係がみられ、重回帰分析による要因分析からは、希望度には有用度 ($\beta = 0.56$) が関与 ($R^2 = 0.41$) していた。

(14) 改善すべき問題

「情報教育支援ボランティアの問題点、要望は何か」という質問の自由記述意見を以下に示す。全体としては高評価であったが、見逃すべきではない意見として、いくつかの点が指摘された。

① 学生の質・活動について

- ある程度のレベルにある学生を派遣してほしい。

- 学生と仕事というズレがある。
- 子どもたちと仲良くできる・教えることが好きといった適性が必要である。
- 積極的に子どもと関わること、約束した日時を守ることを厳守してほしい。
- 単なる単位取得のための活動にとどまらず、社会勉強の意図をふまえて活動してほしい。
- 職員の方へ入っていく感がほしい。
- 子どもを指導することの大切さを考えていくことを意識してほしい。

② 派遣事業の体制

- 長期的・継続的・定期的な派遣体制であれば、さらに役立つと思う。
- 少人数 (1~2人) で短い時間を長期にできるとよいと思う。
- 指導中の事故などの対応の仕方が気になる (学生の派遣先移動時の事故・子どもの事故)。
- 事前の打ち合わせができない。時間を作ってほしい。
- カリキュラムを組むためにどのようなことができるか、事前に具体的な情報がほしい。

(15) 大学担当者への要望

「大学担当者への意見・要望は何か」という質問の自由記述意見を以下に記す。適性ある学生のスクリーニングや事前指導についての指摘がなされた。

① 学生のスクリーニング

- 子どもが好きで積極性ある学生を参加させてほしい。
- よく面接して、学校への派遣ができる方をお願いしたい。人物も技術も良好な方を。

② 事前指導の徹底

- 生半可な気持ちでやらせないよう、お願いしたい。
- 服装や言葉遣い方などのマナーをしっかりと指導してほしい。

4.2 ボランティア学生を対象とした質問紙調査

派遣事業では、2年間で44名の学生が参加した。学生からの活動後アンケート結果を以下に示す。参加学生の自由記述による調査結果から、教育現場での戸惑いを感じつつも「ボランティアを通して人の役に立つこと、体験を楽しむこと」の充実感と喜びがうかがわれた。

(1) 活動にあたって心がけた点

- 子どもたちがPCを好きになれるように注意を払った。
- 難しい言葉を避け説明するように気をつけた。
- 元気よく笑顔で心がけた。

(2) 活動中の問題点

- 自分が使用したことのないソフトについて質問を受けた。

- 活動内容や打ち合わせが担当の教員とできなかった。
 - 児童の習熟度に差があり、対応に戸惑った。
 - 1 度に何人もの児童から呼ばれて対応しきれなかった。
- (3) 活動に参加して良かった点
- 教えるということを体験することができて楽しかった。
 - 子どもたちから楽しかったと言ってもらった。
 - 役に立てたと実感できた。
 - 活動を通して自分に自信が持てた。
- (4) 反省すべき点
- 授業などで使うソフトや機材の予習をすべきだった。
 - 事前に担任の先生と打ち合わせをしておきたかった。
 - 児童 1 人ひとりの顔と名前を一致させたかった。

4.3 派遣先教員・参加学生を対象とした面接調査

事業終了後、派遣先校教員 19 名、無作為抽出した参加学生 8 名を集めて面接調査を行った。教員からは、業務が繁忙で IT の専門知識の修得・スキル向上を図る余裕がなく、IT をもっと有効活用したいができない現状が語られ、参加学生からは、多忙な教育現場の中で自己がどのように行動すべきか判断に迷うケースが多かったことが語られた。最も教員に感謝されたのは児童生徒への学生の個別指導であった。学生側は現場で自分の活動が役立った喜びを語る一方、授業への主体的な参加を求められ、戸惑った体験を語っていた。

5. 考 察

5.1 求められる情報教育支援ボランティア像

教育現場では、情報教育の必要性を強く感じている教員ほど事業の有用性を評価しており、現状満足すなわち〈役立ち度〉が評価されると、当事業の有用感が増して次回派遣を希望するサイクルが認められる(4.1 節(1)~(3)、(13)の分析参照)。またボランティア学生に依頼したい仕事内容の第 1 位は「授業補助」であり(同(4))、単に機械を準備・操作する人材よりも、授業に参加して直接教員を補助する人材が期待されている。当然「専門知識・技術力」への期待は高く、満足度への関与も一番高かったが(同(3)、(5))、「コミュニケーション力」「指導力」「マナー」「外見の適切さ」といった要素もかなり重要視されている(同(6)、(7)、(9)、(10))。「指導力」は「現状の満足度($\beta = 0.28$)」に 2 番目に関与しており(同(7))、3 番目は「外見の適切さ」であった(同(10))。「外見の適切

さ」が「提案・創意工夫力」以上に重視されており、また「マナー」が「指導力」と同等程度に重要視されている結果から、現場が期待しているのは〈对人的能力・性質〉の高い人材であることがうかがえる。

事業後の面接調査結果もふまえ、今回の調査を総合すると、情報教育支援ボランティア像には、即戦力として使える知識・技術を持ち、外見も適切な〈教員としての存在〉が求められていることが分かる。しかし、そうした教員側の期待に対し、参加学生側では、本活動は基本的に黒子としての手伝いの範疇であり、ボランティア活動に参加することで〈人生勉強〉を期待している面が強かった。両者のベクトルには相違があることが明らかとなった。

5.2 派遣事業への意識構造分析

派遣先教員が本事業に求める目的を明らかにするために意識構造分析を行った。その結果を図 14 に示す。現状の満足度には、情報教育支援ボランティアに対する「専門知識・技術力の満足度($\beta = 0.48$)」「指導力の満足度($\beta = 0.28$)」「外見の適切さの満足度($\beta = 0.23$)」がそれぞれ関与し、派遣事業の有用度については、「専門知識・技術力の満足度($\beta = 0.36$)」「授業参画の意識度($\beta = 0.24$)」の各要因が関与していた。派遣の「希望度」には「有用度($\beta = 0.56$)」が関与していた。派遣先では、情報教育支援ボランティアに対し、TT として教員と一緒に〈授業づくりができる技量を持つ人材=教員〉を求めていることがうかがえ、ボランティア学生の専門知識・技術力、指導力、外見の適切さが期待されている。本事業が導入された初年度は、ボランティア学生の受入れ経験がなかったことから心理的に距離感があり、非日常としての様子見である「内容より形式」が優先されていた。継続により双方の距離感が近くなり「日常への組み込み」「形式より内容」の意識が働いてきたことがうかがえる。「非日常から日常」へ意識が変化した結果、こうした教員側の意識が強くなっていると考えられる。

当事業における情報教育支援ボランティアの位置づけは、あくまでも黒子としての補助要員であるが、今回の調査により、積極的に教育現場で活用したいという現場との意識のズレが明確になった。その背景には、教育現場において情報教育を指導することができる人材の不足がうかがえる。高等学校では 2003 年度より普通教科「情報」が必修授業として導入されており、小中学校の教育現場でも「総合的な学習の時間」などで情報教育は積極的に取り入れられている。しかしながら、多くの場合、他教科を専門とする教員が掛け持ちで指導にあたっているのが実情である。今回の調査結果からは、日々の多忙さからスキル向上が間に合わず指導に不安をかかえている教員の現状、一斉授業では個別の対応が困難であり実習指導で目の届かない児童生徒がでてしまうことの危機感が浮き彫りにされた。根本的解決の

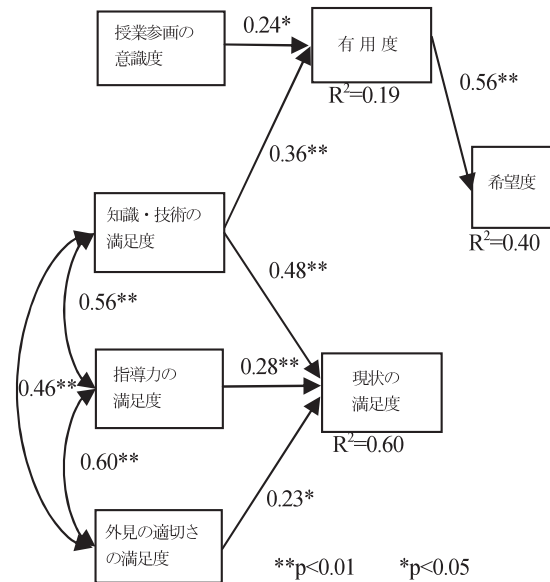


図 14 派遣先教育現場の意識構造

Fig. 14 Consideration structure of educational site at dispatch destination.

ためには情報教育を指導できる専門教員の育成と配置が急務であることはいうまでもない。それが叶わない現状において、情報教育支援ボランティアに代替教員としての機能が要求されている。当該事業のミスマッチの根底は現場と制度のズレともいえる。ミスマッチを防止するには派遣する側・される側の認識をあらためて確認しあい、派遣事業の位置づけを再検討する必要がある。

6. 今後の課題

初年度の 2005 年度は、大学側も初の試みであったため事務手続が中心のオリエンテーションを実施したが、2006 年度以降は、事前研修の側面をより重視し、実際に使用される機材やソフトの操作実習を学生に課している。ボランティア派遣側である大学では、今後学生に心構えを持たせるガイダンス、指導スキル向上を企図したレディネス教育、派遣先とのいっそうの情報共有、事前打合せの緊密化、などが課題だと考えている。

本論文は情報教育シンポジウム SSS2007 での発表をもとに加筆修正したものである。各

データの公表に関しては、印西市教育委員会よりご了解をいただいた。

謝辞 調査などにご協力いただきました、印西市教育委員会の内海正之氏をはじめ本事業関係者の皆様方に感謝いたします。

参考文献

- 1) 文部科学省：文部科学省白書 2007，高度情報通信ネットワーク社会における新たな展開，pp.328-341 (2007).
- 2) 情報処理学会情報処理教育委員会：日本の情報教育・情報処理教育に関する提言 (2005).
- 3) 今野紀子，土肥紳一：学生ボランティアによる情報教育支援ボランティア派遣事業—地域連携と情報教育推進，情報処理学会情報教育シンポジウム SSS2006，Vol.2006，No.8，pp.301-306 (2006).
- 4) 文部科学省中央教育審議会：青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申）(2002).
- 5) 小松裕子：地域密着型の情報ボランティア—地域教育力を大学教育に生かすヒント，高岡短期大学紀要，Vol.20，pp.59-65 (2005).
- 6) 文部科学省生涯学習政策局社会教育課：第 4 回全国奉仕活動・体験活動推進協議会，地域教育再生プラン—地域ボランティア活動推進事業 (2004).
- 7) 辻 利則，川瀬隆千，竹野 茂，田中宏明：CMS を用いた学生ボランティアマッチングシステムの構築，宮崎公立大学人文学部紀要，Vol.13，No.1，pp.183-193 (2006).
- 8) 小林武生：ボランティアコーディネートの必要性に関する一考察：福祉社会形成のための一方策，人間福祉研究，Vol.5，pp.127-140 (2002).
- 9) 印西市：印西市情報化計画 (2002～2006 年度)。

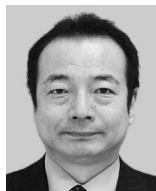
(平成 19 年 12 月 5 日受付)

(平成 20 年 7 月 1 日採録)



今野 紀子 (正会員)

東京電機大学情報環境学部講師。専門分野：心理学。臨床心理士。将来教員をめざす学生の教育（教職課程）に従事。教育効果の評価やテクノストレスに関する研究を進めている。



土肥 紳一（正会員）

東京電機大学情報環境学部准教授．プログラミング入門教育におけるモチベーション向上の研究に従事．工学修士．平成 11 年大会優秀賞受賞．IEEE，ACM 各会員．
